

地域と学習者と共に実践するアセスメントと新たな教育的価値の創出 —岡山大学との協定事業「参加型地域教育アセスメントの共同開発」中間報告

出川 真也（大正大学）

ある人のいわく、人の価は人に定めらるべきものにあらず、
みずから定むべきものなりといえり —森鷗外『知恵袋』より—

はじめに

大学の使命として社会連携や地域貢献が叫ばれて久しい。そしてここ数年はことに、地域創生の呼び声の下、地域社会での学生・教員と住民との活動が盛んにおこなわれるようになってきてもいる。

地域社会とは複合的かつ総合的空間である。地域での教育活動は、ある学問分野のみに限定しえない学際的な社会実践を伴うものである。それは、教育機関が科目の学習プログラムとして設定した時空間を超えたノンフォーマルな場面を含む教育・学習・実践活動といったものとなる。一定条件の下で管理可能な教室等での授業を想定した学習活動とは異なる、きわめて多様で偶然性に富んだ学びの実践であるといえよう。こうした教育実践活動は、地域の様々な人々の参画をもって進められることから、学生・教員のみならず、地域側双方の変容（成長発達）を起こす複雑な相互作用を内包した学習活動である。

地域と共に行う教育実践は、地域とかかわる住民、学生をはじめとした学習者の特性によって、その効果の現れ方も異なる。そもそも学習活動の当初の設定自体が、関係主体に根ざした多様なものとならざるを得ないものであり、実施に当たっては時にマネジメントをする教員や大学職員の思惑を超えた展開（ハプニング！）が起こったりもしてしまう。だが、ここにこそ、この社会連携による教育活動の面白さ（そして、思惑や想定から外れてしまうという意味でのちょっとばかりの「危険さ」）があり、学習時間や試験点数、外形的に設定されたルーブリックなどの基準では一概に測れない魅力があるといえるのである。その一方で、学習効果や成長発達の内実が問われるとき、そして今の活動をさらに新たな他の主体との連携協働や新たな学習活動へとデザインしようとする際、どのようにそれまでの効果や成果を省察し、その良さや問題点を明らかにして、今後の取組むべき学習課題を捉えて有効な歩みへと向かうことができるだろうか。

地域と学習者の特性に根ざした特徴的な教育活動であればあるほど、その取組を正当に評価して、真に意義ある活用を図っていくためには、教育実践活動に係る当事者こそが、アセスメント（評価）活動に参加することが大切であると気づかされるのである。

1. 「参加型地域教育アセスメント」の発想

2018年夏、大正大学本部棟4階のエンロールメント・マネジメント研究所の一室に、地域教育活動に携わる岡山大学の岩淵泰、新潟青陵大学の齋藤智、本学当研究所の福島真司、そして筆者が集った。当日参加できなかったが地域活動に根ざした行政研究を専門とする福知山公立大学の杉岡秀紀からもメッセージをいただいた。

以上の面々で、各自がかかわる地域現場（山村、農村、離島、大学が立地する身近な都市の下町など）での教育実践活動について意見交換した。その楽しさ、ワクワクドキドキする危険をもはらんだ魅力、その教育的・社会的意義について、地域の方々や学生たちと共に取り組んだ自らの生々しい体験をもとに熱心に語り合ったのである。

語り合いの中で、共通認識として浮き彫りになってきたのは、こうした教育実践活動は、「兎にも角にも、地域住民や学生に抛るところが大きい」ということである。地域教育実践は地域住民と学生のおかげで成り立っているわけで、ここでの教員の存在意義は、いかに彼ら・彼女らから学んで、共に有効な学習実践をデザインできるかにかかっている。

大事なことは、教育実践活動を、彼ら・彼女らと共に的確に捉えて評価し、次なる挑戦的実践につなげるための具体的な省察を行えるかではないか。こうした問題意識に立って、上述の有志メンバーによる「参加型地域教育アセスメント研究会」が立ち上がった。

2. 岡山大学との共同研究協定事業

研究に参加する岩淵は、岡山大学地域総合研究センターで若者と地域を繋げたまちづくり活動を展開している。文部科学省留学生拠点整備事業（2012年～2014年）の期間中、岩淵は、「若者が地域と対話するまち」を掲げ、「留学生のまちづくり」を進めていった。その内容は、留学生が大学のキャンパスを飛び出し、地域社会の課題とその解決策を考えることこそ、まちづくりと学生の双方の成長に繋がるというものだ。具体的には、岡山大学のL-café（日本人学生と留学生の交流空間。多文化を学ぶ学び場。）と連携し、宿場町であり、農村の姿が残る矢掛町を訪れている。そこでは、集落と協働しながら、留学生へのホームステイ、田植えや稲刈り、地域に眠るまちづくりの資産を発掘する作業が行われている。2011年11月に発足した同センターは、10年に近づく取組の成果を踏まえて、新たな展開を構想する時期にも到達している。岩淵は、これまでの活動が学生と地域にどのような変化をもたらしたのか、また、この取組に対する彼ら・彼女らのニーズや成長実感を捉えたうえで、次のチャレンジを彼ら・彼女らとともに創り出したい、と考えていた。

こうした問題意識を契機として、同大学と共同研究協定を結び、岩淵と筆者を共同代表として、「参加型地域教育アセスメントの共同開発」に組織的に取り組むこととなった。その目的は、地域における大学の教育活動が、学生と地域の双方に対していかなる変化を与えたのかを分析することであり、内容として上述のフィールドワークを行っている矢掛町地域を対象とし、聞き取り調査やデータ分析を行うこととしている。

3. 調査研究の分析視点

米国の成人教育研究者 E・ハミルトンは、地域づくりモデルの評価観点として、プロセス変数と成果変数に絡む以下の前提条件と理論的枠組みを提示している。

- 1) いくつかの把握可能なプロセス変数がある
- 2) プロセスは現実感覚で理解しやすい枠組みに沿って進行する
- 3) いくつかの予見できる成果がある
- 4) プロセスと成果との関係は、地域づくりを特色ある活動として説明するための枠組みを提供する

プロセス変数	成果変数
① 参加し、関与している住民の数	① 個人の成長
② 期間の長さ	② 啓発的波及効果
③ 住民の組織化能力	③ 組織自体の発展
④ 提起された課題の数	④ 政治的影響
⑤ 地元住民による支援の量と地域づくりの推進力	⑤ 地域の目標
⑥ 資源の効果的活用	⑥ 広範な長期的効果

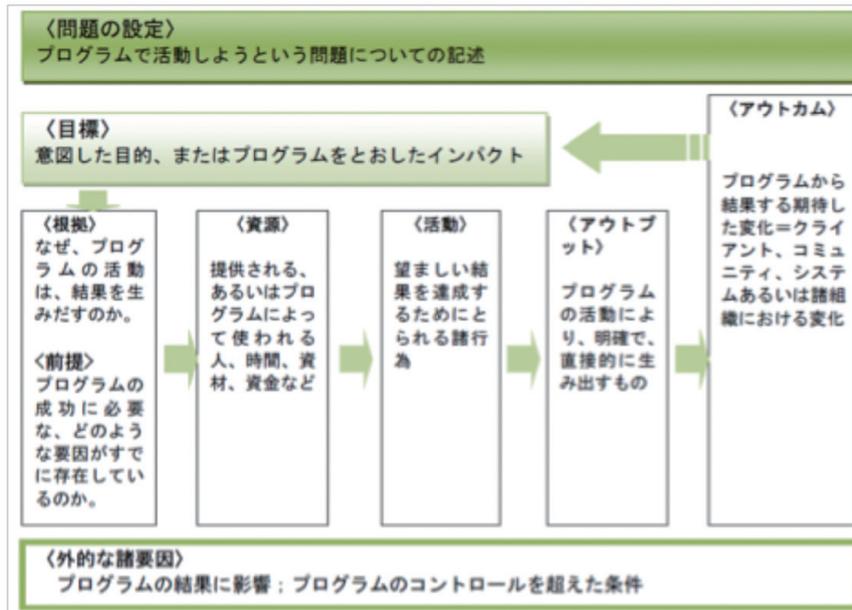
図表 1：地域づくりのプロセス変数と成果変数の要素（ハミルトン 2003p. 165-168 より筆者作成）

これらハミルトンが提起する評価要素を念頭に置きながら、住民や学生にとっても理解しやすく参加可能で、プロセスと成果を論理的かつ視覚的に把握できる「ロジックモデル」を活用したアセスメント（評価）方法を考案することとした。

4. ロジックモデルを基盤とした参加型アセスメント（評価）調査の設計

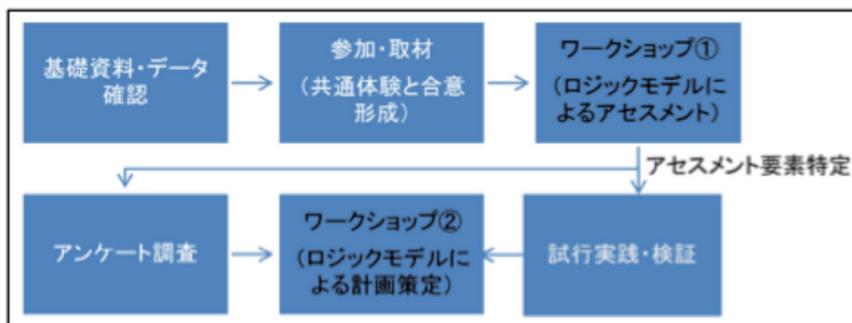
高橋満 2019 はロジックモデルを次のような特性を持つものと説明している。①実践の計画と進行管理を促進するツールであり、②すべてのステークホルダーが参加して対話のなかですすめるために、参加者たちの相互理解と合意を形成する役割を果たす。③地域づくりの実践は、参加者たちの意欲や関心を育むことが最も大切な課題であり、ロジックモデルは、これらを促進する手法である。（以上 EMIR 小研究会資料を基に筆者要約）

ロジックモデルの主要要素は、資源、活動、アウトプット、アウトカムの 4 要素により構成される（ロジックモデルの諸要素は図表 2 参照）。特に注意を要するのは、アウトプットとアウトカムの関係である。アウトプットは活動の結果であり、アウトカムはその結果からもたらされた効果や成果といえる。地域教育実践において、アウトプットよりも、いかにこのアウトカムのアセスメント（評価）へとアプローチできるかが重要であると考えられる。例えば、教育活動により、参加者数や学習時間が伸びたこと（これはアウトプット）の計測にとどまるのではなく、それによってどのような効果や成果をもたらされたか（地域理解の深まりや行動変容をもたらしたなど）ということ、いかにアセスメント（評価）するかこそ問われるべきものである。

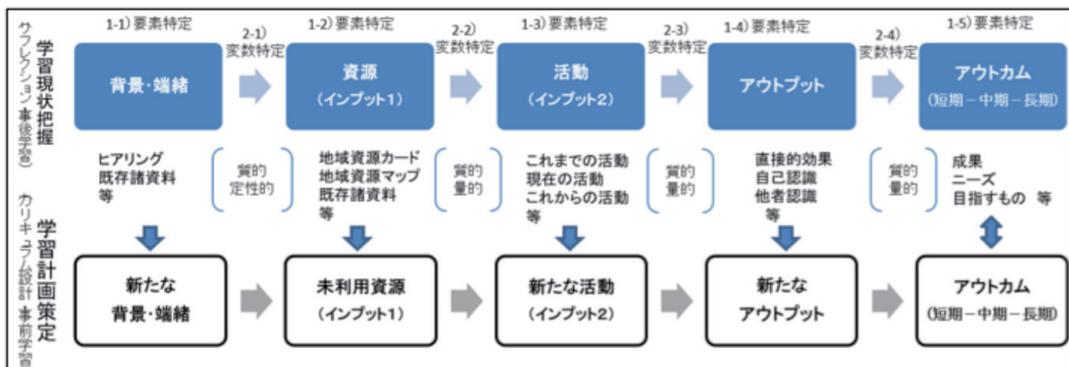


図表 2：ロジックモデルの諸要素（高橋満 2019 資料より引用）

以上を踏まえて、地域住民や学生などのステークホルダーが全プロセスに参加しながら実施することができるアセスメント（評価）活動の設計を行った。それは2回にわたるロジックモデルを用いたワークショップ①②の実施を軸としながら、基礎資料・データの分析から、参加・取材活動、そしてアンケート調査や試行実践など複数の手法を組み合わせで実施するものであり、評価指標の導出から次の計画策定までを連続的に展開していくことを企図したものである（図表3）。ワークショップ①②はアセスメントの前提となる「仮説」（因果関係の予想）を皆で考える機能を持つものである。また、ワークショップの実施に当たっては、特に地域や学習者にとって、評価とは次のチャレンジに向けた計画設計と一体のものとして理解されることに配慮し、学習成果に係る諸要素やその計測手法の導出について皆で議論し合うことを通じて、学習ニーズの意識化や動機付けを高めることを目論むものとしている（図表4）。



図表 3：参加型地域教育アセスメントの全体プロセス



図表4：ロジックモデルを用いたワークショップにおける導出要素とその活用の流れ

5. 現在までの到達点ーロジックモデルを用いたワークショップとアンケート設計ー

岡山大学との共同研究協定事業は、同大地域総合研究センターの岩淵と共に、矢掛町をフィールドとして、同大学の学生（特に留学生）による学習活動を念頭に入れながら、目下、上述の調査プロセスに取り組んでいるところである。2018年から2019年にかけて留学生の受け入れを行っている地域集落や地域活動に取り組む地元高校、そして留学生や日本人学生を対象に、地域や学習者の特性に根ざした評価観点や指標を導出するためのワークショップ①（図表4参照）を実施した。そして、導出された観点・指標を踏まえながら、町内全世帯向けのアンケート調査を設計し、2020年初頭実施する段階まで進んでいる。本稿執筆中の2020年3月現在調査票の回収を進めている状況である。

今後は、アンケート結果や並行して企画されている試行プロジェクトを組み合わせ、ロジックモデルを用いた第2回目のワークショップを行い、本研究開発の成果を取りまとめることを予定している。ここではこれまで実施したロジックモデル活用とアンケート設計にかかわり明らかになったことの一部についてのみ限定して簡単な概説をする。

(1) ロジックモデルを用いたワークショップの実施

中心的に留学生の受け入れを行っている矢掛町江良地区において、地域の諸団体を集めたワークショップを行った。ワークショップの実施に当たっては、ロジックモデルを簡略化した図表5のワークシートを用いて、ノンフォーマルな形で意見交換を行うものとした。

実施の結果、このアセスメントプロセスが住民参加の下で、有効に実施できることを確認できた。また、ワークショップを円滑に推進していく上では、必ずしもロジックモデルの諸要素を、左から右へ順番に特定していく必要はなく、住民の活動実態に合わせて、話しやすいところからランダムに始めることがむしろ有効であることが分かった。江良地区の場合は、活動が顕在化していることもあり、②インプット（活動）の部分の特定から始まり、①インプット（資源）がいかなるものか、そして①②を踏まえて③アウトプットとは何か、そのうえで目指すべき④アウトカムとは何かといった流れで議論が進められた。



図表5：ワークショップ用のロジックモデルシート

参加型の検討は調査者が予想だにしない気づきを得ることができる。その一例として筆者が着目したのは、住民側の評価指標として、地元の子どもたち（小学生から高校生まで）への教育効果を具体的な次元から挙げていたことであった。このため追加調査として、地元の矢掛高校にも同種のワークショップを行った。その結果、卒業生を含めて、留学生や大学生との地域での交流が新たな成長実感や進路への意欲もたらしていることが分かった。並行して同シートを用いながら大学生や留学生とのヒアリング調査を行った。

これらの結果をロジックモデルシートに整理して考察することで、地域と学習者の声による具体的なキーワードを含んだ評価観点や指標の導出が可能となることが確認できた。



写真1 ワークショップの様子（矢掛町江良地区）



写真2：記載されたロジックモデルシート

（2）アンケート調査の設計

ワークショップによって以下の7つのアセスメント（評価）の観点を導出した。

- ①まちづくり活動への参加、②地域の団体やリーダー像、③地域での交流やネットワークづくり、④地域の課題解決、⑤地域の資源活用、⑥住民の知識・学習への影響、⑦コミュニティ意識への影響

これを踏まえ、地域事情に精通する岡山大学地域総合研究センターの岩淵が中心となつて、具体的なアンケート設問を整理した（図表6参照）。

(1) 学生や留学生との学習活動に対する参加実態に関する設問	(3) 地域のまちづくりに与えた変化についての認識に関する設問
① 活動していることを知っていますか ② その活動に参加または協力をしたことはありますか？	① 地域の資源や宝（特産品開発、文化・伝統、お祭りや歴史遺産、おもてなしの心、まちづくりのアイデアなど）を掘り起こした ② 地域資源や宝の活用が進んだ ③ お祭りの維持、人との結びつき、担い手不足の解消などにつながった ④ 住民による地域の課題解決能力を向上させた ⑤ 地域リーダーの役割や責任感が向上した ⑥ 地域団体（農業、福祉、伝統・文化活動）の活動が活発になった ⑦ 地域活動に対する知識・理解が深まった ⑧ 子どもたち（小学生～高校生）の学習に良い効果があった ⑨ 子どもたちが通う学校での学習に良い効果があった ⑩ 子どもたちの家庭での学習に良い効果があった。 ⑪ 次の世代も地域に住み続けてほしいという気持ちになった ⑫ 矢掛町の情報発信につながった ⑬ 若者が歩くことで、まちが元気になった
(2) 住民自身及び周囲に与えた変化に関する設問	
① 地域活動（お祭り、消防団、子供会、サロンなど）に参加するようになった ② 地域活動に新しい発展を感じるようになった ③ 地域団体間（子供会、子育て世代、高齢者、消防団、福祉サロン）のつながりが強くなった ④ 地域と行政（水害復興、農業、福祉、観光など）とのつながりが深くなった ⑤ 企業・教育機関（高校・大学）とのつながりが大切になった ⑥ 地域外（岡山県・国・まちづくり団体など）からの支援（財政面含む）が受けられるようになった ⑦ 地域に対する愛着が深まった	

図表6：ロジックモデルを用いたワークショップをもとに作成されたアンケート調査項目

おわりに

参加型のアセスメント（評価）研究とは、本質的にアクションリサーチであると痛感される。紙幅の都合上ここでは詳述できないが、調査プロセスを一つ進めるごとに住民や学生、教員との濃厚なコミュニケーションによる探求の高揚感を得られるものであり、教育研究者冥利に尽きる経験であった。一方で、こうした評価に係る研究活動を警戒する守旧的な力によるリスクを学内の身近に感じながらの研究経験であった点も否めない。筆者の研究室はこの度、学内のより手狭な場所へ移転することが決まっている。

学習とは（そして学問とは）、本質的にいって開かれた自由な精神の下で行われ、どのような境遇にあってもあきらめず取組もうとする学習主体の弛まぬ努力によって、はじめてその社会的真価が発揮されるものである。それは外形的に設定された評価軸（例えば学習時間）や当局が一方的に設定した政治がらみの指標では計測しえないし、ましてや管理し支配できるものではない。このことは特に様々な人々の参加のもとで行われる地域の教育実践にこそ最も当てはまるものといえよう。

地域と学習者にとって「自分らしい自分になるための学び」とは、どのようなものなのか。教育アセスメント（評価）を彼ら・彼女らと共に我が物として探求していくための研究に

向けて、さらなる挑戦を加速させていきたい。地域と学習者、そして教員・研究者もまた、自らの人生をつくる基盤となる学びにこそ、教育研究の本質があると信じるからである。

参考文献

- 真継伸彦責任編集, 1974, 『日本の名著 42 夏目漱石 森鷗外』中央公論社
- E. ハミルトン著、田中雅文他訳 2003 『成人教育は社会を変える』玉川大学出版部
- 高橋満 2013 『自助・互助・共助が支える福祉コミュニティをつくる～地域力を高める実践>のための計画・評価ツール (第1版)』
- 高橋満 2019 『ロジック・モデルで作る地域福祉実践計画～プログラムの計画と評価の指針～』EMIR 研究会資料
- S. ゲルモン他著 2015 『社会参画する大学と市民学習 アセスメントの原理と技法』学文社
- E. Hamilton , 1992 ,Adult Education For Community Development, Greenwood Press

大正大学エンrollment・マネジメント研究所
紀要編集委員会

委員長 福島 真司

委員 出川 真也
日下田 岳史
柳浦 猛

エンrollment・マネジメントとIR 第1集

2020年3月31日発行

編集発行者 大正大学 エンrollment・マネジメント研究所
〒170-8470
東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

代表者 福島 真司

印刷 株式会社 図書出版
